

ピアニストの健康エッセイ・16

調和

一人でピアノを弾いていると音楽的に人恋しくなる時があります。自分の方向性がこれで正しいのか不安になり、人の意見を求めたり、誰かとアンサンブルをしたくなったり。

これはごく自然な事。孤独や哀愁が似合う作曲家、例えばブラームスやシューベルトも、気の合う知人友人のコミュニティを非常に大切にしていました。ましてや演奏家に至っては、人とのつながりを排除しての活動は基本的に不可能です。

さて、音楽の基本にはメロディーがありますが、そのメロディーを支え動かすハーモニー(和声)には調和の意味があります。そこにはいくつもの決まりごとがありますが、簡単にいうと社会でのルールのようなものです。

誰かと一緒に歌うと気持ちがいいという経験は、きっと誰しもあることでしょう。たとえ難しい理論を知らなくても、きれいに音程が合ったときや異なる旋律が融合したときに生まれる心地よさや連帯感が、すでに調和を理解しているということです。

さて、学生の頃の話ですが、有名なマーラーの交響曲第2番「復活」で合唱に参加したことがあります。大学のイベントで合唱の人数が足りず、ピアノ科の学生までもが突然呼ばれました。何の準備もなく譜面を渡され、皆始めは「忙しいのに・・・」と文句を言いながら、しぶしぶ参加していました。しかし、回を重ねるごとに音楽が流れ、本番で大人数の大舞台に立った時の達成感は、今でも忘れられません。まさに、音楽が調和を促したかのような感動でした。

では音楽家は調和を愛し、人を愛し、崇高な志の人物ばかりなのか・・・と言われると、小さな声で「とんでもない！」とお答えします。

ひとくくりには出来ませんが、少なくとも私自身は決してそうとは言えません。感情の起伏が激しくてバランスがとれず、自爆することもしばしば。

しかし、今日まで懲りることなく音楽を続けています。

仮に嫌なことがあったとしても、音楽そのものの力で相殺しているのでしょう。いや、むしろ浄化されることが多いのかもしれない。

もし身近に合唱の機会があれば、対人関係でストレスを抱えている方こそ、積極的に参加してみることをお勧めします。

丸山美由紀(ピアニスト、富山市在住)